

ともに 歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔を。
暗闇に立ちすくんだ時、
この記録が足元を照らす光となるように。
そしてまた明日の朝を迎えられるように。
朝日新聞社員がつづる。

石巻だよりは、春夏秋冬の
季刊に変わります。
秋号では「明日の風」特別
編をお届けし、「子どもたち」
は休載します。

明日の風

半世紀後へ伝えておきたいこと 原爆ドームに重ねて思う

今秋、石巻市の「震災遺構検討会議」が原爆ドームを訪ねた。
案内役は被爆50周年事業を担った元広島市職員。重ねて思う。
半世紀後へ伝えておきたいこと。繰り返さぬ。願いをこめ、苦しい記憶を文字に残す。

遺構の写真 千枚以上を収録

今年9月。石巻市の旧門脇かどわき小学校
校舎の保存を考える「震災遺構検討
会議」の一行が、広島駅に降り立った。

原田浩さんが出迎えた。広島平和記
念資料館の館長と広島市の国際・平和
担当理事を兼務して1995年の被爆
50周年の数々の事業を担い、原爆ド
ームの世界遺産登録にも奔走した。

原田さんは一行を「被爆建造物」へ
案内した。「被爆建造物」。私たち
はいくつ思い描けるだろう。

50周年事業で広島市が作った本があ

る。「ヒロシマの被爆建造物は語る――

未来への記録」。A B判400頁の大き
な写真集だ。今も平和記念資料館で購
入できる。石巻市の一行が視察した袋
町小学校や旧日本銀行支店、旧陸軍被
服支廠しじょうの工場や倉庫、広島赤十字病院
の遺構も載っている。

序章で監修の学識者が述べる。
「この書物完成の原動力となった事
務局の熱意に心から感謝する」

事務局は数人の市職員。社史や建
築雑誌に絵葉書、米国からの返還資料
も探し、市民にも呼びかけ、労苦の末
に建物や橋など400件余りの建造物
の約1世紀にわたる史料を収集し、
1千枚以上の写真を収録した。

最初に掲載するのは「広島県産業奨
励館」。原爆ドームの被爆前の姿だ。

1915年竣工。チエコの建築家の
設計だ。当時の知事が広島赴任前、宮
城県知事の際に松島パークホテル設計
者の彼とつながったことを紹介し、解
説する。現代のような重機はなく、す
べて地元の職人が手作業で仕上げた。

曲線に従うレンガ壁の高難度の施工も
さらに高度な技術が必要だった銅板で
の楕円形ドームの製作も。「広島職
人が大胆な洋風デザインに挑戦したと
いう意味でも貴重な作品である」

工事中のドームの上で職人らが胸を
張って立つ写真がある。川面に映える
端麗な姿の写真には「水の都と呼ばれ

る広島でもこれほど川を意識した建物
は他になかった。だが、頁をめくると
「廃墟と化した爆心地」に変わり
果てた姿が佇む。その前を行く「修道
女に手を引かれる原爆孤児」の写真。
保存の経緯も詳述する。人々を動か
したのは、1歳で被爆して16歳で亡く
なった高校生が残した言葉。「あとい
たいらしい原爆ドームだけが、いつま
でも恐るべき原爆を世に伝えてくれる
でしょう」。被爆21年後の1966年、
広島市議会は保存を決議。その費用を
集めるのに市長も街頭募金に立った。

市職員が編んだ市民の声

写真集完成に導いた市職員の熱意
を象徴するもう1冊の本がある。

『ひろしま21世紀へのはがき』だ。50
周年事業で、市民の声を葉書で集め、
平和記念資料館で被爆100周年に公
開する計画を練った。集まったのは
9万通超。規定の葉書に切手を貼る手
間を惜しまず、5世帯に1世帯が応募
したに等しい数だ。区役所、図書館、
公民館、保育園、学校、すべての市の
施設で投函箱を手作りし、盛り上げた。
1通1通が心を打つ。小学校から、

届いた児童132人分は、指示書の通りに並べると、原爆ドームの大きな絵に。絵の雰囲気は損ねないように1通1通に一言二言添えてある。

中学校でも、留守家庭子供会でも、同様の取り組みが。教師の思い、応える子らの思いに奮い立つ。当初計画にない出版を職員らは考えた。「募集時に本の話はしていない。一人ひとりの了解をとらなくては」とためらう職員もいたが、「それなら了解をとればいいじゃないか」と原田さん。問い合わせれば「ぜひに」という声ばかり。

通常は識者らの選考委員会に頼んで作文の技法も吟味するところを、原田さんは「職員一人ひとりが心に残るものを選ばばいい」。心に残る、それを何より大切にしたい。388通をB6判に収めた。クレヨン画に水彩画、写真もそのままオールカラーだ。全9部分に分け、各部の題は原田さんがつけた。

第1部「愛 大切なあの人へ」は53歳の女性の葉書から紹介。「被爆50年。あなたも犠牲者の一人です。あなたが41才になると同時に天国にめざされて10年が過ぎました。小さかった子供達も後少しで社会人。少し心のゆとりのなか、あなたのことばかり考えます。よくやったと思いきり抱きし

めて欲しい」

次の葉書には2歳の子の手形と両親の言葉。「かわいい君の手が、このハガキじゃ足りないくらい大きくなって、そうして、いつの日か君の傍で君を励ますことができなくなってしまっても、ずっとずっと君のことを想っています」

6歳の体験が原点

今秋の原田さんの講演を聞いた。天皇皇后両陛下やドイツのワイツゼッカー大統領ら要人を前に語った館長時代と変わらない真摯な口調だ。

あの時。何の予告もなく、鉄が溶ける温度の倍を超す4千度の熱線を、台風の10倍を超える爆風を、自分の体で受け止めざるをえなかった市民。半

径2キロ圏内が全焼全滅。一方、今日までの核実験は2千回を超え、地球上の核兵器は1万5千発と見込まれる。

そう説いてから原田さんは「私の話を少し」。咳払いし、こみあげる激情をぐっとのみこむ。封じ込めていた悲惨な情景の記憶を引き出す。今も、ひと呼吸、ふた呼吸おこなっては語れない。「6歳の時に広島駅で被爆しました」

美術専攻の高校生たちが被爆者たちの体験を絵に描き続けている。原田さんも頼んだ。何度も描きかえてもらい、最後は折れた。生徒もつらかったろう。「私自身、当時の状況を十分に表したくなかったのです」。2枚の絵を見せる。崩れ落ちた駅舎から這い出す父と子。そして父に手を引かれた子と、その行く手に倒れ込む人々の絵。

門脇小学校校舎をめぐる思いと、響き合う。

「震災遺構検討会議」メンバーの1人、佐藤美香さんは、校舎をそのまま残したいと望む。「そこにあつてこそ何が起きたのか説明できますから」

あの日。防災無線が大津波警報を告げる中、佐藤さんの6歳の長女、愛梨さんは、幼稚園のバスに乗せられた。バスは山を下り、海辺をめぐる、門脇小学校に寄った。学校を離れた後、

渋滞の中で流されて炎に包まれた。校舎は、当時の炎の勢いを証言する唯一の遺構であり、それゆえに愛梨さん家族の深い悲嘆をも物語る。

校舎前に立つと、母の思いはこみあげる。学校でバスから下ろしてくれら。学校脇の階段を歩かせてくれたら。山へ逃げられたのに。助かったのに。「私にはつらい場所です。でも残したい。忘れてほしくない。二度と繰り返してほしくないのです」

焦土の中で愛梨さんを捜し出したのは両親だった。父はそっと抱き上げた。いっしょに行こうねと顔にやさしくタオルをかけたそのとき、わずかに形をとどめていたちいさな鼻がほろり、とおちた。父にはそれが今も悔やまれる。

愛梨さんには3歳下の妹がいる。やがて妹が理解する日が来るだろう。姉の最後を。父の涙を。この先、妹が向き合う悲しみも、忘れまい。校舎と共に心に刻む。



絵にはない光景を語る。列をなして逃げる人の中に父子はいた。人々を踏み進むしかない。熱線で溶けた体の中に、爆風で砕けた体の中に、6歳の足はのめりこむ。ぬけない。迫る炎。背後の人が急かす。必死にぬき、また踏み込む。「そういう体験があるからこそ……」。声を振り絞り、原田さんは講演を結ぶ。「核兵器を決して使ってはいけな」と伝えたのです」

その思いは、石巻市の旧

雄勝巡礼

第2章

石巻市雄勝町の港そばにあった
雄勝病院の家族の話が続けよう。

[第3回]

満面の笑み「わたしの、あげる」

新婚の頃の写真がある。
ベンチに腰掛けた2人。

小柄な妻は、両足を宙に浮かせ、満面の笑み。隣に長身の夫がゆったり座る。

『小さな恋のものがたり』（みつはしちかこ作）のチッチとサリーのような2人がいる。

雄勝町役場勤務の佐々木勇人さんと町立雄勝病院栄養士の加藤弘江さんは仕事の接点がなく、町職員の親睦会で初めて出会う。一緒に卓球をした。

妻は中学校で卓球部。その腕前は「うまくはなかったですなえ」と夫は笑う。

夫は石巻工業高校を卒業後、就職。スポーツ好きだ。職場で野球チームを組んでいた。

だが、彼は身体障害者1級の手帳を持つ。

腎臓病だった。中学時代に闘病が始まり、22歳の時、仙台社会保険病院で移植手術を受けた。米国の若者からの提供だ。空輸費7千ドルは、両親に負わせず自分でローンを組んで返済した。結婚前に約5年、付き合った。



その間に勇人さんは弘江さんに腎移植のことも打ち明けた。

「ゆくゆくこの1個もだめになる」。そう話すと、弘江さんは即座に言った。

「わたしの、あげる」

「いやいや……。それより子どもを育ててください」

実際は内緒だった。

弘江さんは3人きょうだいの末っ子。心を決めてから、母や姉に報告した。

突然の話に、母は当惑した。

「よくよく考えなさい」と念を押した。末っ子の心が揺らぐことはなかった。

結婚前、管理栄養士の国家資

格を取るために妻が猛勉強して

いたことを夫は覚えている。育

児が始まれば勉強できないと覚

悟し、初挑戦で合格した。

その妻の栄養管理の下、1個の腎臓は長らく頑張った。夫が再度の移植を受けたのは50歳の時。2010年だった。

1994年10月22日。

宮城郡松島町のホテル松島大

観荘で結婚式を挙げた。

前日からしとしと降っていた

雨は、昼には小やみになった。

ホテルから望む松島湾の水面

は平らかに天を仰いでいる。

新郎は34歳。新婦は25歳。

花嫁の入場。

白無垢から透き通るような白

い肌がのぞく。

姉の理恵さん、兄の伸幸さん

も見守る。母の孝さんは、隣に

座る理恵さんにささやいた。

「弘江ちゃん、きれいだね」

96年3月。弘江さんは長女を

出産した。

朝、窓の外を小雪がちらつく。

気温は氷点下まで下がることは

なく、午後には4度に。ゆっく

りと春に向かっていた。帝王切開だった。土曜日だっ

たので、姉も兄も駆けつけた。

「弘江ちゃんの赤ちゃんにやっ

と会える」

母の孝さんが嬉しそうに漏ら

したのを姉は覚えていた。

98年2月。次女を出産。

この日も土曜日で、姉も兄も

来てくれたと夫は話すが、2人

は「なんか印象薄いね」。

長野五輪の開会式の日でもあ

り、皆、病院のテレビに釘付け

に。帝王切開は待つしかないこ

とも長女の時に分かったので。

弘江さんは「わたし、これから

大変なのに、みんなオリンピック

ク見て」とほやいていた。

2007年1月の長男の出産

もまた土曜日。

兄も来た。姉も娘3人を連れ

て来て、順番に抱かせてもらった。

翌08年。母の孝さんが他界し

た。くも膜下出血で倒れ、7年

ほど闘病生活をつづけた。

当初、父の圭宏さんは、孝さ

んを毎日見舞いたいと近隣の病

院にこだわった。合唱団で歌っ

ていた孝さんのため、父は音楽

のテープを持っていく。「一緒に

口ずさんだよ」と喜んだ。

しかし、3カ月後には退院を

迫られる。転院に次ぐ転院。そ

の間に父も入院する。

疲れ果てた時、雄勝病院が引

き受けてくれた。家からは車で

1時間以上かかるが、弘江さん

がいる。安心して託せた。

孝さんは、最後の約半年間を

末っ子のそばで過ごした。

家族7人を率いた母だった。

父と、理恵さん、伸幸さん、

弘江さん、父方の祖父母、父の

妹である叔母と暮らした。

道路越え家並み越え響く母の声

叔母は知的障害がある。叔母のために何でもしていた祖母へ、孝さんは、身の回りのことは自分でさせるように言った。

厳しいと非難されても、それが叔母のためであり、皆のためだと譲らなかつた。

理恵さんや伸幸さんに愚痴めいた話をしたことはない。さっぱりした気風の母だった。

孝さんは、理恵さんに、こう話したことがある。

「勇人さんのお母さんは弘江ちゃんが悪口言わないんだよ。それってありがたいよね」

弘江さんは結婚後、雄勝町の中心街、味噌作りに暮らした。

同じ中心街の上雄勝に、勇人さんの父幸手司さん、母かつ子さんが暮らしていた。

長女と次女が保育所に通っていた時は、幸手司さんとかつへ

女川町議会 福島を視察⑮

デブリどう取り出すか 予定が立っていない

女川町議会は2014年7月、福島県の東京電力福島第一原発事故の被災地を視察した。その時に対応した2人を今春、私は再訪した。1人目、福島県の大熊町議会事務局長・池沢洋一氏(59)の話前回に続いて記す。

原発は大熊町北端から隣接の双葉町にまたがって立つ。11年3月11日夜。池沢氏は、原発の緊急炉心冷却装置が正常に働いたという話を聞く一方で「どうも危ないらしい」という噂も耳にしたが、確認のしようもなく、体育館へ避難してくる町民への対応に追われた。

12日午前6時頃。「念のため避難して下さい」という政府の指示を聞き、原発の異変を察知。茨城県から来たバス数十台と自衛隊トラック数十台も使い、午後2時頃までに町民の大半を送り出す。

池沢氏を含む町職員約10人が町に残った。飲料水確保のため、町役場で給水塔の水を自衛隊の給水車へ抜き出す作業をしていた時だ。「パーン」と大きな音。大地を揺るがすほどの音ではないが、空気の振動が体に伝わってきた。

午後3時36分。1号機の爆発だった。(これ発電所だよ)と思いつつも、(ここかの工場の可能性もあるよね)と半信半疑。だが、(これをかぶると、まずい)とホースを投げ、自衛隊員らに「みなさんもなんぼ自衛隊だと言っても、汚染されたら大変だから、逃げたほうがいいですよ」と呼びかけて車に乗った。約8キロ離れた丘で原発の方角を振り返った。

薄灰色の煙が、噴煙のようにうろこを描きながら雲一つない青空へ伸びていくのを見た。一目散に逃げた。手にした私物は、タバコと携帯電話と運転免許証だけ。放射能汚染は念頭にあって、すぐに帰れる気持ちでいた。「安全神話に頭が冒されていたのかな」と話す。

町から約60キロ離れた三春町の体育館でテレビを見た。14日に3号機でも爆発。15日に4号機でも爆発が起きたのを見て、「これ、ひょっとしたら帰れないんじゃないかねえ……」と口にした。

周囲から「ああ……」とうめき声が漏れ、泣き始める人もいた。

2カ月後の5月。津波の犠牲者を捜索する自衛隊に1時間ほど立ち合った。携行した線量計のアラームは「ピピピ」と

鳴り続け、数値がみるみる上がる。居ても立ってもいられない思いだ。放射能汚染を初めて実感した。その時の被曝線量は56マイクロシーベルト——。私が今春、町から約100キロ離れた会津若松市に池沢氏を訪ねた時の空間放射線量は毎時0・07マイクロシーベルトだった。

15年8月、町は全町民にアンケートをした。将来的な希望も含め町へ戻りたいと考えている人は11・4%。回収率は50・0%だった。アンケートを返さなかったのは戻らないからだと考えれば、戻りたい人は全町民の5・7%になるか。

池沢氏は帰るつもりだ。家族は帰らないと言っけれど。

今、町南端で市街地整備が進む。そこに、町民約1千人と、研究者や原発の廃炉作業従事者ら約2千人の計約3千人が移り住むことを町は見込む。

原発の廃炉作業はいつ終わるのか。まだ明確には見通せない。原子炉で溶け落ちた燃料デブリが立ちはだかっている。

池沢氏は言う。「デブリそのものを誰も見ていないんです。どう取り出すか、予定が立っていない。取り出せるのか。それも、これからの話ですよ」

そもそも原発は、こんな仕組みで電気を生みだしている。原子炉でウラン燃料に中性子をぶつけて核分裂を起こす。その時に発生する高温の熱で水を沸かす。その蒸気でタービンを回して、電気を得る。

燃料は、使用前なら、少しくらい近づいてもさほどの害毒はない。だが、使用中は違う。核分裂が進むにつれ、放射線を出す物質の量も種類も増える。使用済みの燃料になれば、強烈な放射線を出す物質のかたまりになり、近寄れば死に至る。放射線の強さが使用前のレベルに下がるには、10万年はかかるとされる。

池沢氏は語る。「現在の原子力政策は、あとの処分のことは考えていない」。原子力政策に限った話ではない。震災直後は日本各地で節電に努めた。が、「あつという間にまた元に戻り、市街地は一晩中、明かりをつけていますよね」。

「人が生きるのに廃棄物を出す。それがまた戻ってきて役立つ、その繰り返しで人の生活が、地上そのものが成り立つ。それを超えるものがあってはならないだろうと思うんです」

子さんが迎えに行き、小学生の時は、夏休み中、幸手司さんとかつ子さんが預かった。孝さんの妹夫婦も雄勝町に暮らしており、町のうわさは妹夫婦の耳に入る。かつ子さんが弘江さんを悪く言ったという話は一切なかった。結婚後も弘江さんはいつも素顔。夜寝る前に化粧水をつける

くらい。

家ではジーパン。白衣の下もジーパン。小学校の入学式や卒業式には姉の服を借りた。

「買った」と夫が言っても、買わない。

姉は笑って言う。「サイズが一緒ですからね」

姉兄と誕生日は短いメールを交わす。姉は、震災の前年の

メールを携帯に大事に保存する。

姉の誕生日の翌朝6時29分の着信。件名は「遅れてごめんなさい」。ロウソクがともるパースデーケーキの絵が届いた。

弘江さんは正月には必ず父の圭宏さんを訪ねた。休日にも立ち寄り、食事を作る。やさしい薄味の家庭料理。帰る時は明るい声で「じゃあね」。

母を見送る時も泣かなかった父が震災後、「弘江の行方がわからない」と泣いたのを兄は思い出す。兄が初めて見た父の涙だった。震災の年の暮れ、父も旅立った。

家族思いの小さな末っ子。その子が3人の子を育てる。長女の春香さんが反抗期を迎えて宿題をさぼる時、母は容赦

しなかった。

「はるかーっ」

母の声は、家の前の道路を越え、その向こうの家並みも越え、その先の通り沿いにある友だちの家まで響いた。翌朝、春香さんは友だちに言われる。

「春ちゃんのお母さん昨日も怒っていたね」

末っ子はパワフルな母になる。